

## 第46回アメリカブドウ・ワイン学会年次大会参加記

近畿大学農学部

米 虫 節 夫

6月21～24日にオレゴン州ポートランドで行われた親学会の本年度年次大会 46th Annual Meeting of the American Society for Enology and Viticulture (21-24 June 1995) に参加した。本年は、日本部会 Executive Director 横塚弘毅先生と同「ASEV 日本ブドウ・ワイン学会誌」編集委員長米虫節夫の2人旅であった。年次大会終了後は、カリフォルニア州デイビスに行き、UC Davis 校及び ASEV の事務所などに周った。

6月21日に大阪（伊丹）空港を出発、成田にて横塚先生と会い、アメリカンエヤーライン（AA26）にて、ワシントン州シアトル空港へ。昨年は、親学会へのおみやげとして「ASEV Japan REPORTS」の過去に発行した各号を2セット製本したものを持参し、大変重い荷物になってしまったが、今年はそのようなものもなく手軽なバッグだったので、バッゲージクレームで待つこともなく、簡単にアメリカに入国・通関した。ところが、国際線の到着ロビーである南サテライトターミナルから、国内線の発着ロビーに行くのに案外手間取ってしまった。日本の旅行社が準備してくれた国内線乗り継ぎのパンフレットを、今見直してみてもその内容は、理解しがたいものである。やっとの事で、国内線の航空会社 Horizon の窓口にたどり着いた。40人弱の定員の小さな飛行機で、左手にタコマ富士 Mt. Ranier の山頂を観つつ、一路、ポートランド空港へ。

ポートランド空港では、近畿大学農学部農芸化学科卒業生で現在オレゴン州立大学大学院に在学中の住井謙亮君にピックアップされ、予約しておいたホテルである Red Lion Hotel/Lloyd Center まで送り届けてもらう。同ホテルでは、20～21日に International Symposium on Clonal Selection が、21日には Alambic Pot Still Brandy Production Seminar が行われていたので、ホテルのロビーでは旧知の何人かの人に会った。時差の関係で、長い1日になっていたので、部屋で暫時休息の後、佐藤（メルシャン）、田淵（マーカム）両氏とオレゴンワインを賞味しながら夕食をとった。横塚先生は、Board of Directors Reception & Dinner に日本部会を代表して参加された。今年は懇親会が開かれなかったので、このレセプションで本年度の活動報告、各賞の受賞紹介、各部会の活動報告、新旧会長の挨拶などが行われたそうである。

22日、ホテルから徒歩約10分の ASEV 年次大会会場 Oregon Convention Center へ行き、参加登録をして、2冊の小冊子、プログラムと要旨集 (technical abstracts) をもらう。プログラムに掲載されている Tom Peterson 会長の Wellcome 挨拶によれば、本年の大会の The technical sessions では、約60件の発表と、それを補足する ASEV の Technical Projects Committee 企画による4つのセミナーから構成されているとのことである。4つのセミナーのテーマは、次の通りである。

1. Viewpoints on Clonal Selection,
2. Analytical Regulations & Int'l. Trade,
3. Diagnosing Vineyard Problems,
4. Demystifying Required Analytical Tests.

会場で日本からの参加者数人に会う。Presenting Authors List には、4人の日本人氏名があった。今年は、我々以外は全員が企業 (キリンビール、サントリー、メルシャン) からの参加者だった。

参加者はすべて、会員か非会員かなどが色でわかる名札を胸につけ、さらに「会長」、「前会長」、「発表者」、「展示発表者」等の人は、名札の下にそれぞれの名称を書いたリボンをついている。昨年の ASEV Japan 年次大会発表者につけてもらったリボンである。発表者に質問をしようとするときには、実に便利であり、年次大会への寄与が明確になるアメリカ的なシステムだと1年ぶりに再度感心した。

プログラムの中に The ASEV thanks the following wineries for donating their wines to 1995 Annual Meeting (Confirmed at time of publication) というページがあった。ASEV Japan の年次大会でも、懇親会の席で、同じような感謝のリストが掲示されるが、プログラムに印刷されていることに意味がある。日本でも、同様のことが出来ればとも思うが、大会準備の忙しさと煩雑さから思うと、事前の印刷はかなり困難であろう。年次大会終了後の報告中に、ワインの寄贈を受けた企業名を掲載するのが精一杯であろうか。

ASEV 年次大会では、多くの企業が Exhibitor として参加している。今年も約150社が展示をしていた。ブドウ栽培、ワイン製造に関連する各種設備、機器、部品等から、各種アクセサリー類までが展示されている。概して展示内容は、企業からの参加者をターゲットにしているようだ。もちろん、参加者個人のために(?) いくつかの場所で、ワインの試飲会も行われている。観ているだけで楽しい。まじめな勉強も大事だが、学会に楽しく参加することも必要だろう。

Michael Martini 夫人と会い、今秋の ASEV Japan 年次大会開催時の来日の件について打ち合わせをする。特に、甲府大会の後の国内旅行についての希望などを聞く。同夫人の希望を入れると、例年通り関西旅行になりそうである。

昨年北海道池田町で行われた ASEV Japan 年次大会に招待した Bladley Alderson 夫妻から、夕食会の御招待があった。招かれたのは横塚、米虫、佐藤、田淵の4人である。Red Lion Hotel/Lloid Center のバーで会い、同ホテル内のレストラン Maxim でサーモン料理をご馳走になった。その時賞味した Alderson 氏が自分のワイナリーから持参された赤ワインは絶品であった。改めてお礼を申し上げたい。有り難うございます。筆者は、ASEV 年次大会に昨年から参加しただけであるが、毎年参加されている横塚先生の話では、このようなご招待を受けたのは初めてだとのことであった。貴重な体験をさせてもらったことになる。なお、本誌の読者の多くがすでにご承知と思うが（筆者は ASEV 年次大会会場で配布されていたので初めて知ったが）、“Wines & Vines” 誌の本年 6 月号（横塚先生は講読されている由）には、Alderson 氏が頑張っている Mondavi Woodbridge の紹介記事があり、Mondavi が Woodbridge に頗る力を入れているとのことである。

23日は、前述の住井君と彼の友人の若い夫婦 Crith & Sharman の運転と案内で、ポートランド郊外のドライブとワイナリー・ツアーやを楽しんだ。オレゴン州とワシントン州の州境である Columbia River 沿いにインターチェイブ・ハイウェイ 84号線を東進、途中から緑のトンネルを行く旧道にはいる。シーニック・ハイウェイ Scenic Highway といわれ、コロンビア渓谷のもっとも美しい景観に恵まれた街道といわれるだけの価値は十分にあった。途中の展望台 Crown Point は、川の水面から210m の高さで、渓谷の全貌がパノラマ写真よろしく見渡せる。道路の近くには、いくつかの滝が散在した。その内の Multnomah Falls は、2段になっており、上段は542ft、下段は69ft で、下段の上の上段の滝壺の近くまで散歩道が整備されていた。

昼食は、Colombia Gorge Hotel という、1921年に創設された古いホテルでとる。地ビールを飲み、鴨の定食料理を賞味する。さらに、車を進め、Mt.Hood の南側中腹の登山やスキーのための基地、Timberline Lodge に至る。1937年に造られたという外観石造りの古城のようなロッジである。ここでも地ビールを飲み、しばし休憩。大学院で民族学を専攻しているという Crith 夫妻は、このロッジに展示されている民俗資料などの歴史展示物ツアーやに参加していた。

Mt.Hood からポートランドへの帰途途中に、Edgefield というワイナリーを見学する。オレゴン州のワイナリーはその所在地によって、大きく 6 地域に分けられている。ポートランドに近い方から、南に向かって、North Willamette, South Willamette, Umpqua, Rogue、東に向かって、Columbia River Valley, Walla Walla Valley がある。この 6 地域にはほとんどのワイナリーは含まれている。“Discover Oregon Wineries” (1995 edition) には70軒のワイナリーの特徴などが紹介され、それ以外にも42軒のワイ

ナリーが名称のみ紹介されている。

North Willamette に属する Edgefield Winery は、ポートランドに近く経営の多角化で有名である。通常のワイナリー施設・設備である醸造設備、貯酒・熟成庫、官能検査室等のほかに、このワイナリーは “The Power Station Pub and Theater, 105 bed and breakfast rooms, meeting and 5 banquet rooms, wedding facilities, gardens, amphitheater, northwest artwork, and the splendid Black Rabbit Restaurant and Bar” などがある。日本のワイナリーでも、最近はレストランやバーを併設するところは多くなってきたが、宿泊施設、会議室、結婚式場、野外音楽会場などは、まだまだ少ないだろう。

一旦ホテルに帰り、着替えた後、ポートランドのダウンタウンにある The Founders Club の Atwater's というレストランに夕食を取りに行く。ポートランドでも格式の高い(?)高級店だとのこと。食事中、日米の考え方の違い、女性の権利・地位の日米差などの話題が弾み、3時間近くかけてフルコースの夕食を楽しむ。5人でチップも入れて\$350. だった。日本であれば、2人でもこれ以上の金額になっただろう。店を出たのは24:00をかなりまわってからである。

24日、ポートランドを発ち、サクラメントへ向かう。空港で、サクラメント空港行きのHorizon 航空の窓口に行くと overbooking で座席が無いとのこと。サクラメント空港には Dr.Singleton がお迎えにきてくださるということなので、Horizon の担当者にそのことを述べ、座席の確保を依頼。overbooking の時の恒例の行事であるボランティア募集のセリが始まり、数人が応じたので、何とか席が確保できた。このときのセリの条件は聞き逃したが、帰りのサクラメントからシアトルへの Horizon 便では「サクラメントからアラスカの往復切符」がボランティアへの景品であった。アメリカの国内地方便では、良くある風景だが、ボランティアへの応募者がいつもかなりな人数になるのは、アメリカ的な博愛精神の発露なのであろうか。

サクラメント空港では猛暑の中を Dr.Singleton ご夫妻がお迎えにきてくださった。Davis は学生女子バレーボール大会があるとのことで、宿泊施設の多くがその関係者で一杯とのことだったが、先生ご夫妻が探してくださった Davis University Lodge というところに無事チェックイン出来た。

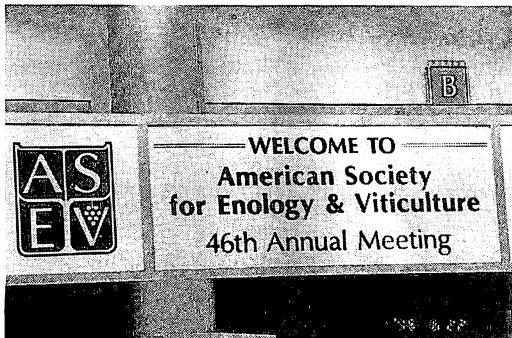
夕食を「大阪寿司」という店でとる。大阪生まれの者が、アメリカで「大阪」と名の付く寿司屋に行き、東南アジア系の従業員に日本の寿司を注文をするのもおかしなものだと思った。もちろん魚をさばき、寿司を握っているのも日本人ではない。しかし、最近アメリカで急に増加した多くの寿司屋に共通することでもあろう。

25日、初めて UC Davis 校内を車で周り、かつ徒歩で歩き周り、その大きさに驚かさ

れた。25, 26の両日は、校内を歩き、お上りさんよろしく Department of Viticulture & Enology の建物、施設などを中心に写真に撮った。このとき、醸造施設や貯酒・保存庫の撮影には、Prof. Roger Boulton に大変お世話になった。さらに、ASEV の事務所などにも足を延ばし、事務所外観などの写真撮影をしてきた。御存じない方のために、それら写真のいくつかを、載せておく。Dr. Singleton には、ASEV の事務所まで先生運転の車で連れていってもらうとともに、奥様手作りの夕食までご馳走してもらった。改めてお礼申し上げたい。

27日早朝、Dr. Singleton ご夫妻にピックアップされ、サクラメント空港までお送りいただく。前述のような overbooking の Horizon 航空で、シアトルへ、さらにアメリカンエアライン (AA27) に乗り換え、翌日28日の15:15、無事成田空港に着き、帰国した。東京駅まで、横塚先生とご一緒し、そこで分かれ、各自帰途についた。(1995. 08. 16記)

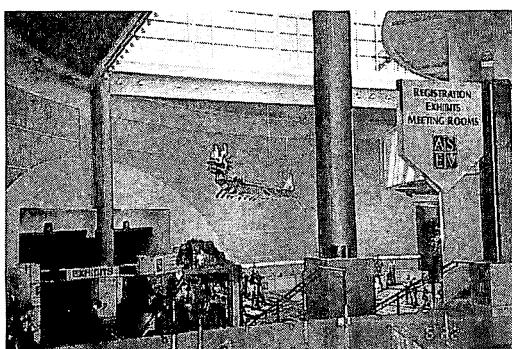
(近畿大学農学部 米虫節夫)



1-1. ASEV 46th Annual Meeting の Wellcome bord



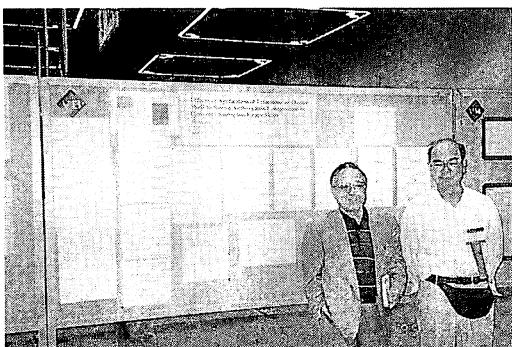
1-5. Alderson 夫妻による夕食会点景



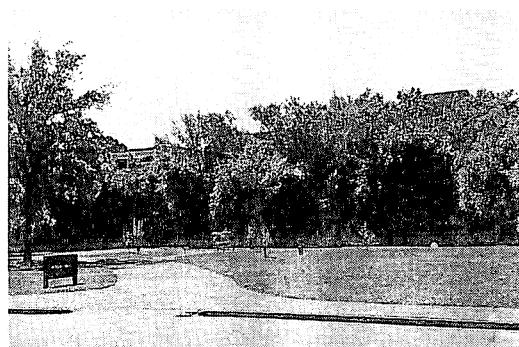
1-2. 登録会場の全景



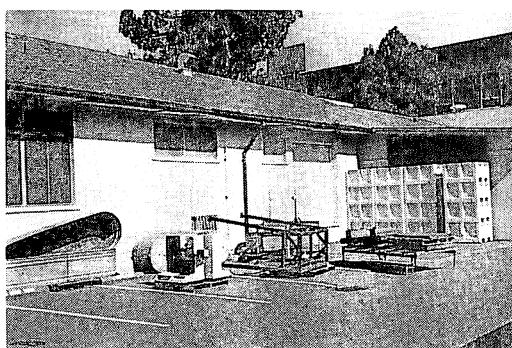
1-6. Alderson 夫妻との記念写真



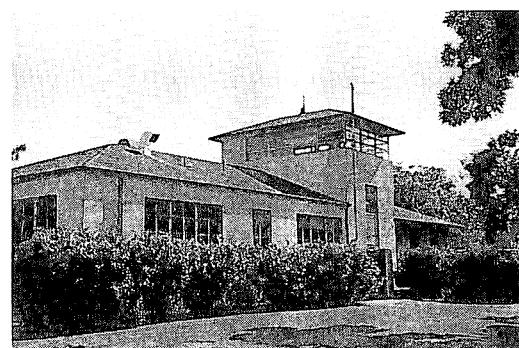
1-3. Presenter のリボンをつけた佐藤氏  
と共同発表者の横塚先生



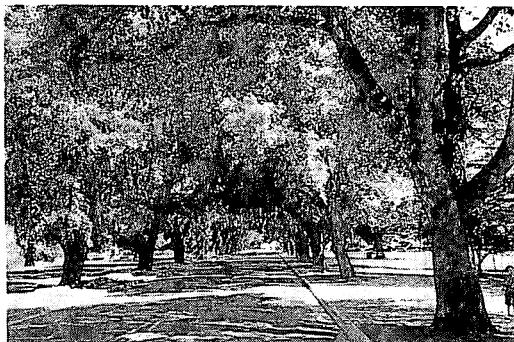
1-7. UC Davis の醸造学科建物外観



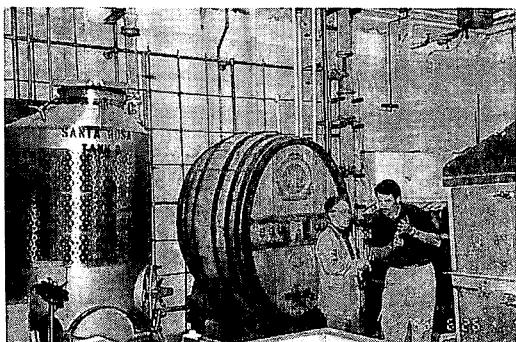
1-4. UC Davis の醸造所外観



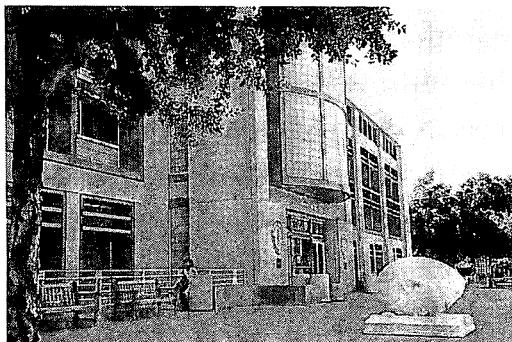
1-8. UC Davis の醸造所外観



2-1. UC Davis 校内のコルクの木の並木道



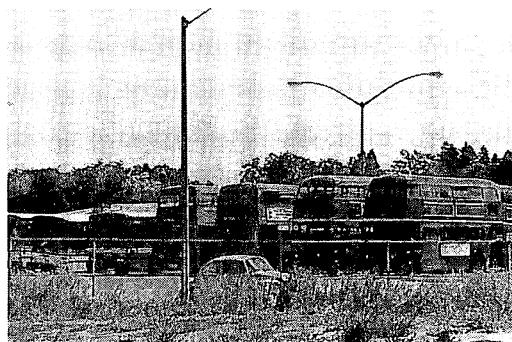
2-5. UC Davis 製造所内部  
(横塚先生と Prof. R. Boulton)



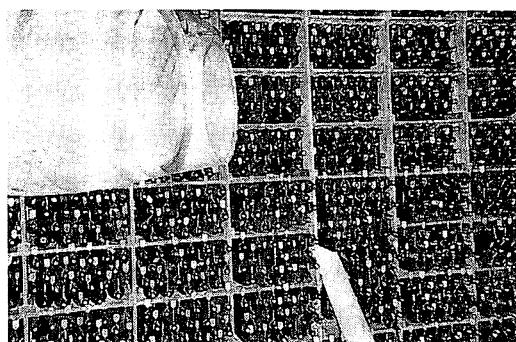
2-2. UC Davis 校内の図書館とその前の造形物



2-6. UC Davis 蒸酒所内部 (最も古いとい  
うワインの瓶を持つ Prof. R. Boulton)



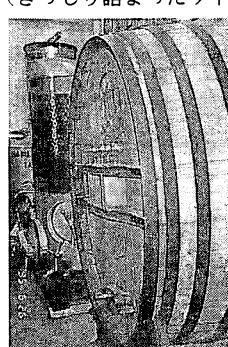
2-3. UC Davis の 2 階建ての校内バス



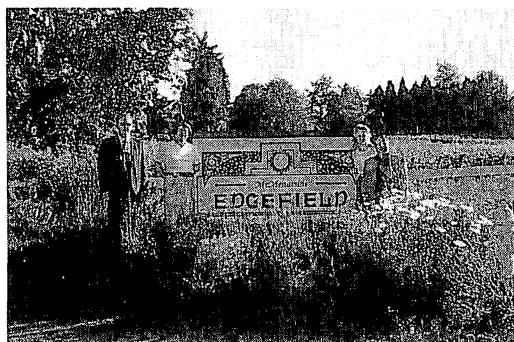
2-7. UC Davis 蒸酒所内部  
(ぎっしり詰まつたワインの瓶の行列)



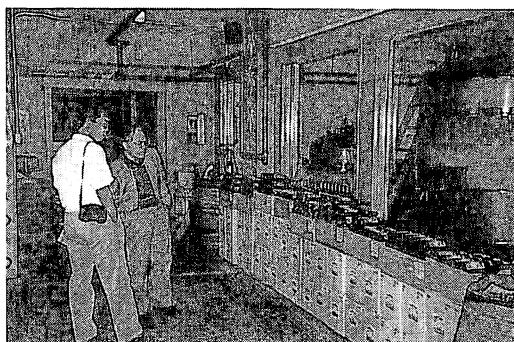
2-4. UC Davis 農場のブドウ畠



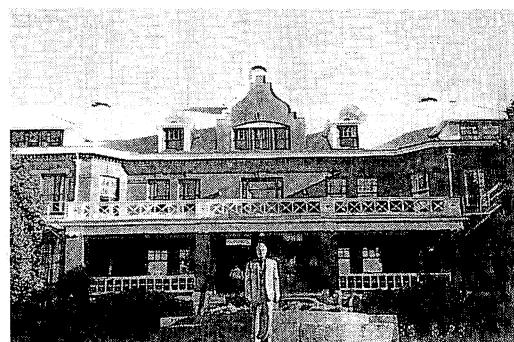
2-8. UC Davis 蒸酒所内部  
(大学の紋章を彫刻した大樽)



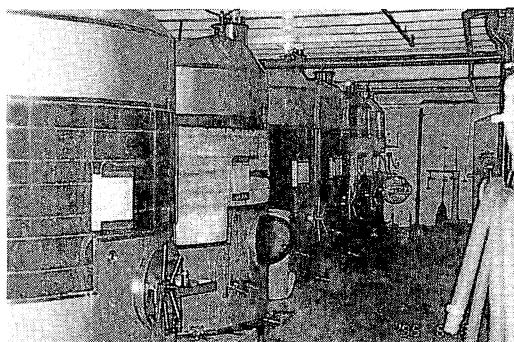
3-1. Edgefield winery の入口の看板



3-5. Edgefield winery 貯酒所、  
小型樽の列



3-2. Edgefield winery の本館・事務所



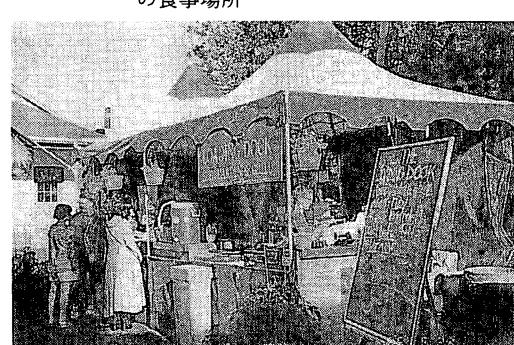
3-6. Edgefield winery 貯酒所、  
冷却装置の付いたタンクの列



3-3. Edgefield winery 野外 Dock Grill  
の食事場所



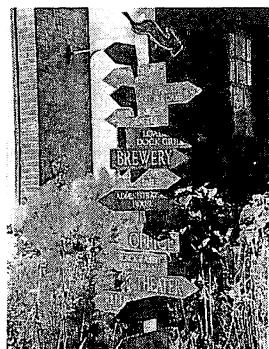
3-7. Edgefield winery 貯酒所、樽



3-4. Edgefield winery 野外 Dock Grill  
の売店



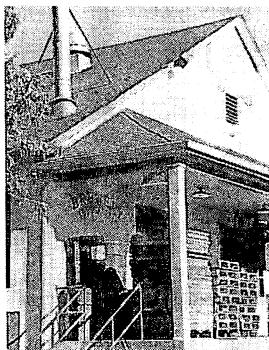
3-8. Edgefield winery のテース  
ティングカウンター



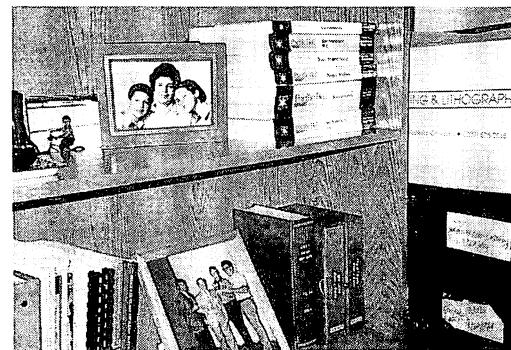
4-1. Edgefield Winery の方向指示・案内版



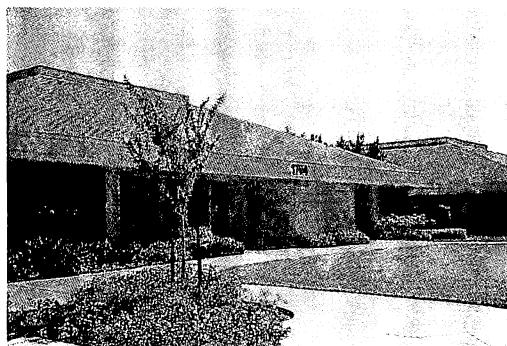
4-5. ASEV 事務所の受付



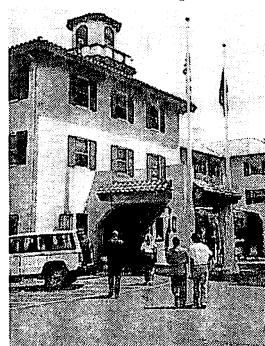
4-2. Edgefield Winery の醸造所



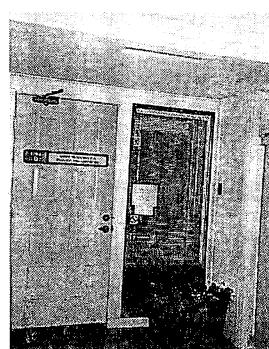
4-6. Executive Director L.Bourtonの机上に置かれていた製本して昨年渡した [ ASEV Japan REPORTS ]



4-3. ASEV 事務所遠景



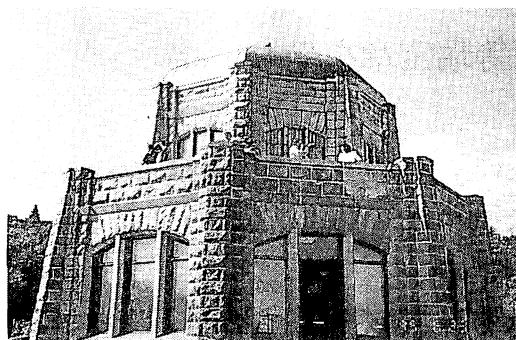
5-6. The Columbia Gorge Hotel 外観



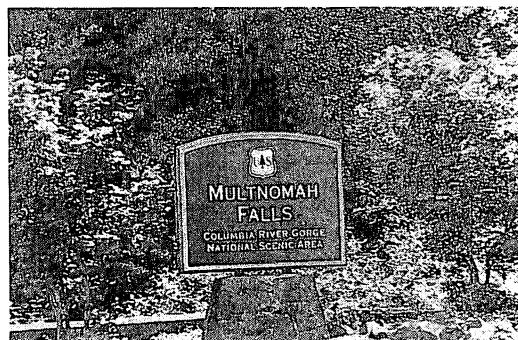
4-4. ASEV 事務所の入口



5-7. The Columbia Gorge Hotel での昼食



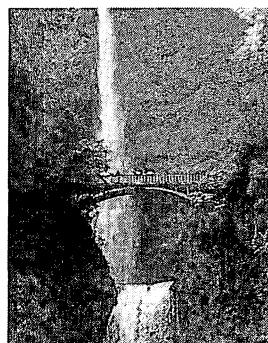
5-1. Columbia River の Crown Point



5-4. Multnomah Falls の看板



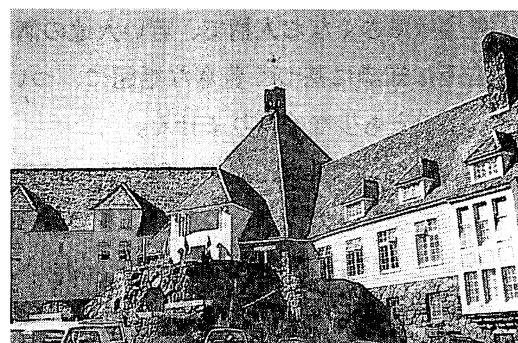
5-2. Crown Point から上流側を望む



5-5. 2段になった Multnomah Falls の途中の観光橋



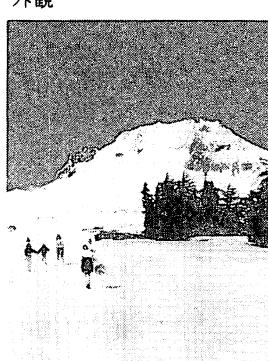
5-3. Crown Point から下流側を望む



6-1. Mt. Hood 中腹の Timberline Lodge 外観



6-3. The Founders Club Atwater's の受付横の待合室での記念写真



6-2. 雪のまだ残る Mt. Hood